

大学 インタビュー 2

大阪大学

研究に取り組む上で必要な資質・能力を明らかにし、 社会課題に挑む人材の育成を目指す

社会課題に挑戦する人材の輩出を重点戦略に掲げる大阪大学は、多様な観点での入学者選抜を実施。入学後は学生の成長を可視化し、資質・能力を伸ばす体制を構築している。

教科学習では、 自ら答えを導き出す経験を

大阪大学は、2022年1月に、中長期的な経営ビジョンである「OU (Osaka University) マスタープラン2027」(図)を取りまとめた。そこでは、「未来の様々な社会課題に挑戦する力強い人材」の輩出を重点戦略に掲げている。豊田岐聡副学長は、「本学には、我々が持つ『知性』『英知』を結集して社会との共創を活性化させ、社会を変革する力を生み出すことが期待されている。そのため、好奇心と試行錯誤する力を備えた学生を求めている」と語る。

課題を発見し、試行錯誤しながら答えを導き出す経験は、特別な

活動に参加しなくても、高校の教科学習や特別活動で積むことができると、豊田副学長は強調する。

「例えば、数学の問題の中には、解法が1つではなく、複数存在するものがあります。すべての解法を丸暗記して入試を乗り切る受験生も少なくないですが、それでは大学入学後、太刀打ちできない問いに幾つも出合うでしょう。途中でつまずいたら、別のアプローチに挑戦し、よりよい解法を見つける。高校生の皆さんには、そのように粘り強く試行錯誤する経験を、普段の教科学習の中で積んでほしいと思っています」

粘り強く取り組む原動力は「好奇心」だと、豊田副学長は述べる。「私が子どもの頃は、時計やテ

レビを分解するなど、不思議だなと思ったことは、何でも自分の手で調べてみるのがあたり前でした。今は、スマートフォンなどで調べれば、すぐに答えが見つかるため、自分で考え抜く力が不足し、研究を主体的に進められない学生が増えていると感じます。実験に何度も挑戦し、仮説通りの結果が出なくても、粘り強く取り組めるよう、普段の生活においても好奇心を大切にし、答えが1つではない問いに向き合う時間を大切にしたいと思っています」

同大学では、アドミッション・ポリシーとして、「確かな基礎学力及び主体的に学ぶ態度を有し、自ら課題を発見し探究しようとする意欲に溢れる人を受け入れる」と掲げている。

そのような学生を、多様な観点で適正に選抜するため、17年度入試より、推薦入試(現学校推薦型選抜)とAO入試(現総合型選抜)を実施している。

また、17年度に推薦・AO入試で入学した学生が、4年間にわたってどのように成長したのかを、追跡調査した。その結果、推薦・AO入試で入学した学生は、一般入試(現一般選抜)で入学した学生と比べてGPA(※)が高く、4年次に行った指導教員による評価においても、「研究力」が高いことが明らかになった。

「指導教員には、『実験が仮説通りにいかなくても、諦めずに取り組むことができる』『課題・テ

2025年度入試情報(※)

◎文理関係なく、大学入学共通テストを課す選抜においては、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す。

* 2022年9月15日現在。

※ Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることができる。



副学長
豊田 岐聡
とよだ たかのり
2018年4月から現職。

マに関して、事例や経験などから、法則性を見いだしたり、仮説を形成したりすることが『できる』など、研究に対する主体性を評価してもらいました。その結果、すべての項目で、推薦・AO入試で入学した学生の評価が一般入試で入学した学生の評価を上回っていました。学校推薦型選抜や総合型選抜では、高校時代にどのような課題にどう取り組み、何ができたようになったのかを、自分の言葉で語れるのかどうかを見るための面接や口頭試問を、25年度入試以降も引き続き、実施したいと考えています」

25年度入試では、全学部で共通テストの「情報Ⅰ」を課す

同大学では、22年5月に、新学習指導要領に対応した25年度大学入学者選抜における出題教科・科

目等を発表した。入学希望者に求める資質・能力は、現行の入試から変更はないが、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課すことにした。その理由を、豊田副学長は次のように述べる。

「今後は、文理関係なく、情報活用能力が必要になることは間違いありません。例えば、文系学部でも、膨大な資料から特定のキーワードを抽出する際は、データ分析のスキルが必要です。そのため、高校時代には、コンピューターの基礎やビッグデータを扱う素養を身につけておいてほしいと思っています」

コンピューターをツールとして活用する力を備えた高校生も多いが、「なぜ、コンピューターは動くのか?」「どのようにしてメモリに記憶しているのか?」などといったことにも興味を持ち、コンピューターの原理を学んでほしいと、豊田副学長は話す。

「情報の授業では、コンピューターの基本構成や動作の原理を理解してほしいと思います。そうした基礎知識を学び、仕組みを理解

することが、プログラミングやデータ分析を学ぶ土台となり、大学での研究に必要な高度な情報活用能力の修得につながります」

データを活用し、個別最適な学習を支援

「OUマスタープラン2027」では、単に「社会に貢献する」ということにとどまらず、一歩踏み込み、新たな「社会を創造していく大学」を目指し、各種教育環境の整備を進めている。

その1つが、22年4月に立ち上げられたStudent Life-Cycle Support System (SLiCS)だ。SLiCSは、データを基盤とした、個別最適学習・学生支援システムの構築を目的としている。

「本システムで

は、入学前から、卒業後の活躍までを見据えた学生のキャリアにかかわる情報やデータを蓄積、分析する予定です。その結果に基づいたフィードバックを、学生一人ひとりにすることで、個別最適な学習の支援を目指しています。そして、本学での教育成果を可視化することで、本学による社会への貢献を明らかにしていきたいと思っています」

図 OU マスタープラン2027の概要



※大学資料をそのまま掲載。